

ナイルとファラオの夢の跡 感動のエジプト紀行8日間

四日目はアスワンから飛行機でアブシンベル向かい、今回の目玉の一つであるアブ・シンベル神殿を見学する。その後、飛行機でカイロへ移動する。

1 アブ・シンベル神殿移築に最も多い資金負担をした日本

朝7.45"ホテルを出発する、ガイドのムスタファーは開口一番「アッサラム・アレイコン」とアラビア語教室で始まった。彼の説明ではおはようとか、こんにちはの「あいさつ」の言葉だという。エジプト人が言うので間違いないだろうが、いただいたガイドブックでは「こんにちは」で、おはようは「サバーハ・ルヘイル」と記されていた。ちなみにこんばんはは「ミサー・ルヘイル」とあったが、とても覚えにくい言葉なので覚えられたのはありがたいの「シュクラン」だけだ。

ガイドの説明

- 。エジプト人は8.30" ~ 14.00"まで働き、15.30"まで休憩する。夜は喫茶店へ行き帰ってから夕食を食べる。さらに紅茶を飲むが、多くの人はずっと砂糖を入れる。そしてすぐ寝るので太る。
- 。家の中は日本と違い靴を履いたまま
- 。ガソリンは原油を産出するので安くて45円/リットル
- 。カローラは280万円する
- 。アスワンからアブ・シンベル300kmは砂漠の道に行く、バスはコンボイその時間はAM4.00"、AM4.30" AM11.00"と決まっている。



部屋から見たナイル川

こんな話を聞いているうちに8.15"空港に到着した、が、いきなりトラブル発生でアブ・シンベル行き9.30"のMS-132は45分遅れるという。でも結局10.30"に出発して11.00"にアブ・シンベル空港に着陸した。ここから10分ほどで神殿に到着する。スーダンとの国境まで50km、砂漠の太陽に照らされ突如として出現する巨大な岩

窟神殿、紀元前1250年頃にラムセス2世が建造したアブ・シンベル神殿。太陽の王と讃えられたラムセス2世は、太陽に輝くヌビアの地にファラオの力が永遠のものになるよう、巨大神殿を造り上げた。

その神殿も砂に埋もれてしまったが、19世紀にブルクハルトにより発見され、再びその勇姿を現した。しかし、1960年にはアスワンハイダム completionにより水没の危機にさらされる。

世界が協力したユネスコ遺跡救済事業

ユネスコの事務総長がヌビアを視察、本格的な遺跡救済計画が打ち出された。14の神殿と3つの聖堂、1つの墳墓が救われた。アブ・シンベル神殿は、これが契機となって世界的な観光地となった。アブ・シンベル神殿の移築工事は限りなく同じ環境に置くため、移築先は元の場所から北へ64m、西へ110mの地点に定められた。

移築は世界中から提案された方法を協議した結果、遺跡を1036のブロックに解体し、マーキングしてクレーンで吊り上げ運搬、再建するというスウェーデン案(ムスタファーはイタリア案と言った)が採用された。

1963年から始まった工事には各国の技術者を含む3,000人が動員され、5年の歳月をかけて現在の場所に移された。ここでムスタファーから聞いた言葉に一瞬耳を疑った、それは、この時日本が最も多い資金負担をしたという。

そのお礼としてエジプトは、ツタンカーメンの黄金のマスクの日本展示を認めたというのだ。でも日本でそのような報道がされたとは記憶していない。事実なら日本政府に言いたい、こんな立派なことにお金を使ったのなら国民にきちんと知らせろ!!

われわれは税金がどのように使われたか知る権利がある、というよりも、なんと説明べたなのか。立派なことをやっても国民に理解されないではないか。

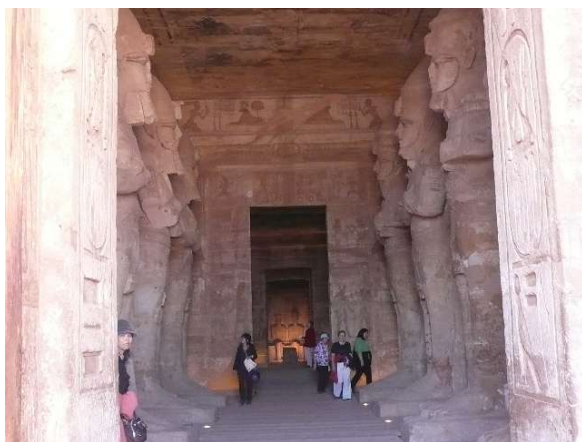


アブ・シンベル大神殿

2 すばらしい仕掛けもある大神殿

神殿の正面には高さ21mのラムセス2世像が4体並んでいる。神殿の入り口横、ラムセス2世の巨像の足下にはレリーフが刻まれその絵は、上下エジプトを統一するファラオであることを示している。幅2mほどしかない狭い入り口を入ると、オシリス神の姿をしたラムセス2世像が4体ずつ中央に向かい合って並んでいる。冥界の王である

オシリスの姿をとることは、永遠の命を得ることと考えられていたのだ。神殿の一番奥にある至聖所には、向かって右から太陽神ラー、神格化されたラムセス2世、王の守護神アメン・ラー、宇宙の創造神プタハの4体の神像がある。そして、年2回、2月22日と10月22日に地平線から昇った朝日は至聖所まで一直線に差し込み、神々の像を浮かび上がらせる。すばらしい仕掛けが施されていた、この日はラムセス2世の誕生日と王座に就いた日だという。この神殿内部も写真撮影は出来ない、でも入り口からならOKといって撮らせてくれた。



大神殿の内部



アブシンベル小神殿

そして少し離れた北側には小神殿がある、これはラムセス2世が第一王妃ネフェルタリのために築いたもの。入り口を中心に高さ10m程の2体のネフェルタリ像と4体のラムセス2世像が交互に立つ。壁には、「この神殿を王妃ネフェルタリとハトホル女神に捧げる」とヒエログリフで刻まれている。

周りはナセル湖と砂しかない砂漠と、雲ひとつない青い空が広がっている。雄大な景色を眺めていると、湖面を渡る風が心地よく感じられた。

ラムセス2世とは

古代エジプトの歴代ファラオの中でも大王の称号を与えられる人物。22歳で即位しその後67年の永きにわたり国を治めた。89歳の生涯のうち7人の王妃と数十人の愛人との間に、200人もの子供をもうけた超人的なファラオといわれている。

異国の脅威をはねのけ、エジプトの繁栄と平和を守るのがファラオの使命で、この使命を最も全うしたのがラムセス2世であり、彼がファラオの中のファラオ、神々に祝福された「太陽の王、光の王子」といわれる所以である。

現存するラムセス2世に関する建造物は、ファラオの中で最も多くてタニス、カイロ、サッカラ、メンフィス、アビドス、ルクソール、アスワン、アブ・シンベルなどで見られる。

13.00"に見学を終り空港に戻る、バスに乗る際大きな袋の弁当が渡される。空港に着いてすぐに弁当を広げた、お水にジュース、パンはホットドック、魚料理とすごいボリュームでとても食べきれない。ホットドックを食べて他は袋ごと掃除のおばちゃんに渡してきた、荷物が邪魔になるのだ。

MS-0135は午前の遅れそのままに14.00"に離陸して、アスワン経由でカイロに16.40"到着した。

3 カイロの第一印象は「暗い」

17.15"空港を出てカイロの街へ向かう、驚いたことに市街地に近づくと高速道路というが、人が横断している。とても危険だが、こうした光景をあちこちで見ることになる。ビルが建ち並ぶ市街地に入りなんとなく暗い感じがする、よく見ると建物の窓に灯りがほとんど見られないのだ。さらに見ていて分かったのはほとんどが集合住宅のようで、商業ビルはすくないようなのだ。ガイドの話では、今日はエジプトとカメルーンのサッカーの試合があるので、観戦に行っているのかな。

それに、高速道路の高架下を走っている時には、柱から柱の周囲は土砂が積み上げられている。何かと思えば高架下に水路があって、その土砂を掘り出したものだった。首都のカイロなのですぐに片付けないのか不思議に思ったが、これまではエジプトの田舎を見てきてゴミの多いのに驚かされたように、都会も同じらしい。

4 パピルスで紙を作る

18.00" パピルスのお土産店に寄る、最初にムスタファーが日本語の出来る店員を紹介する。彼はもっと日本語を勉強して、ムスタファーのようにガイドをめざしているという。ムスタファー自身もここで働いていたそうで、ガイドを養成して日本人の観光客をたくさん誘致したい作戦のようだ。

店員はパピルスがどのような物か客に見せてくれる、それは一辺が15mm位の三角形の断面を持つ葦だ。ちなみにパピルスというのはペルシア語で、茎の長さは2mから5mになるという。次に30cm程の長さに切って皮をむく、むいた皮を引っ張ってみるというので私が力一杯引っ張るも、びくともしなかった。

皮をむいた中味をスライスして、次にそれらを縦横に組み合わせて並べ、簡単な機械で押さえつけて紙を作る。こうして作られたパピルスに対して、市場などで安く売っているものはバショウの葉で作ったものという。このあと店内を見て回るがすばらしい作品ばかりで、いずれも数万円から数十万円の代物。とても手が出ない、その中で一つお安く気に入った物があったので買い求めた。

帰ってから調べて分かったが、それはツタンカーメンの玉座(背もたれ)に描かれたもの。ファラオと香油を塗る王妃の頭上には太陽円盤が.....ツタンカーメンとアンケセナーメンのロイヤルカップルを描いている。

5 夕食後ピラミッドのライトアップに感動

19.00" からレストランで夕食、ケバブ、コフタという料理らしいがチキン・ソーセージみたいな焼肉・チャーハン? それにパンではなくてナンがでた。味はまずまずだったのだが、スープがなくて食べにくかった。やはりエジプトの料理はわれわれ日本人むきではない。それよりピラミッドのライトアップが見られるというので、食事後にビルの屋上へ案内してくれるという。それならと真っ先に2階から5階まで上って屋上に行くと、暗闇の中にピラミッドが赤や青い色に照らされて浮かびあがっており、とても幻想的なシーンに感動した。

エジプトにきたらピラミッドを見なくては来たとはいえない、そんな存在がピラミッドであり、予定表にはなかったのもとても嬉しかった。他の皆も口々にすばらしいを連発しており、現地ガイドに感謝したい。

20.00"に食事を終わりホテルへ向かう、街中の繁華街にひとときわ高くそびえているのがラムセス・ヒルトンホテル。遠くからでもすぐ分かる存在だ、20.40"ホテル着。部屋は11階の1102号室、都会の騒音は届かず静かでよい。テレビはNHK海外放送が見られるというので早速スイッチを入れる、でもONしない。ここで佐溝さんの話を思い出す、テレビはチャンネルボタンを押さないとONしないのだ。NHKはチャンネル36久しぶりに日本語の放送を見ることが出来た、しかし、ニュース放送がなかったのを見ることはやめた。